

M35a 歴史的文献にみる17～20世紀の中国のオーロラの記録

河村聡人 (京都大学), 早川尚志 (京都大学), 玉澤春史 (京都大学), 磯部洋明 (京都大学)

近年の他の太陽型星の観測や樹木の年輪などの放射性同位体調査の結果から、我々の太陽でも爆発的現象（フレア）が未だ科学的に観測したことのない規模で、所謂スーパーフレアが起こるのではとの議論がある。しかしながら、この際に注目される時間スケールは、数百年に一度程度の頻度であり、往々にして人類の黒点観測史を超えうるものである。その様な時間スケールを議論する場合、数少ない手掛かりとなるのが歴史的資料である。特にフレアなどに起因するオーロラは天変として記録に残りやすく、またその観測地点より太陽活動の規模を推定する際にも一助となる。かつてはこの様な歴史的資料の研究は手作業による資料検索によって行われていたが、近年の技術の発展により歴史的資料のデジタル化、データベース化が進み、精度と研究速度の両面において特筆すべき進展を得た。

我々は既に宋史（中国の宋の歴史書）についてオーロラ記録の発掘・報告を行ったが、この度は清史稿（中国の清の歴史書）について行った同様の研究の成果を発表する。清代（1616～1911年）はマウンダー極小期を含み、また西洋の近代的な観測と東洋の伝統的な観測が並行して行われた唯一の時代である。故に清史稿からのオーロラ観測記録は極小期の太陽活動の理解を深める上でも、またそれ以前の東洋の伝統的な観測記録の理解を深める上でも多大な重要性を秘めていると考えている。